

道

michi

'26.5
No. 96

靈界の転換

靈界が夜昼転換するにおいて、人間に対していかなる変化が起るかということを書いてみよう。

病氣は浄化作用であることは、もはや説く必要はあるまい。しかしながら、ここに知っておかねばならないことは、肉体の浄化作用が起るより以前に、靈体の方が先に浄化作用が起るということであつて、それは靈体それ自身が靈界に属しているからである。

しかるに、夜の世界においての靈界は、暗黒かまたは月の光であるから、浄化力が極めて微弱であつたことで、昼の世界に比べて何十分の一の力である。故に、夜の世界であつた時期の間は、浄化作用を促進させることは困難であるため、止むを得ずその反対である浄化作用停止すなわち固める手段を採らねばならなかつたので、それが病氣治癒の唯一の方法とされて今日に至つたのである。しかるに、昭和六年すなわち滿州事変頃から靈界に光明が射し初めたのであるから、この頃より漸次浄化作用が強烈になつてきたのである。すなわち、黎明期に入つた訳である。

これがさきに説いたごとく、夜の世界の右進左退の暗黒的リズムに対し、昼の世界の左進右退の光明のリズムの運動が靈界に起こり始めたのである。このリズムの変化によつて世界のあらゆる事象が転換し始めたのは勿論である。この根本原理を知識しない限り、世界の趨勢は明らかに知るを得ないのである。

そうして、左進右退のリズムが浄化作用そのものであるから、年一年浄化作用は旺盛になりつつあるので、この意味において、漸次浄化作用停止は不可能となるのである。故に、黎明期以前においては、病氣に罹るや、薬毒その他の方法によつて浄化作用停止を行うことがある程度可能であつたのである。例えて言

えば停止期間が三年であるとすれば、その三年間が治癒した形となつたのである。それが黎明期から漸次停止期間が一年となり、三カ月となり、一カ月となり、十日というように短縮され、いずれは停止が不可能になるのである。しかるに、右の原理に不明である医学はあくまで浄化作用停止を行おうとする。その方法としてますます薬毒を強烈にしなければならぬ。なおその方法も、服薬よりも注射による方が、より強烈な毒素を使用でき得るから、浄化作用停止に効果があるわけである。近来、注射療法が流行するようになったのも、右の理由によるのである。また近来、注射をするやたちまち生命を落とすということをよく聞くのであるが、まったく強力なる浄化作用停止の方法が、強力なる浄化作用と衝突し、激烈なる摩擦を起こすから、急激に右のような結果を來すのである。

右の理論の証左として、医家においても近来薬の効果が以前より少なくなつたというが、それはまったく靈界における浄化作用が旺盛になつた結果である。

そうして浄化作用停止とは、勿論溶解作用の起こつた毒素を固めようとするのであるから、以前のごとく固め難くなつたというわけである。

そうして近来医学においては、病氣に罹つてから治す医学よりも、病氣に罹らせない医学すなわち予防医学に重点をおく方針にするそうであるが、これはちよつと聞くとともにものようであるが実は、病氣に対して今日の医学があまりにも治らないので、止むを得ずそうせざるをえなくなつたためであらう。それほどに治病効果が薄くなつたといふことはいかに浄化作用が旺盛になつたかを如実に物語っているのである。



阿波鳴門之風景 歌川広重
江戸時代（19世紀）大判錦絵 三枚続
MOA美術館所蔵

現在の兵庫県淡路島と徳島県の大毛島との間の海峡を描いたもので、狭い海峡に岩礁多く、瀬戸内海と紀伊水道との水面の水準の差から生ずる潮流の渦が鳴り響く趣を表し、渦の位置まで写実的であるといわれています。鳴門の瀬戸を淡い藍色で画面いっぱいに描き、前方に遠く四国の山々の連なりを、その遠山の尽きるところにわずかに遠く水平線をのぞかせています。この三枚続きは、「木曾路之山川」「武陽金沢八勝夜景」とともに雪月花に擬した広重晩年の揃物で、鳴門の風景を「波の花」と見立て花の図としています。

《目次》

み教え	2
代表挨拶	4
感謝奉告 土佐みろく教会 KR	10
感謝奉告 伊丹グループ IS	12
【聖地・聖蹟シリーズ】みあとしのびて 5	15
五月度ご面会（箱根）	20
五月度月次祭（熱海）	21
感謝奉告 伊丹グループ OM	22
感謝奉告 東大阪グループ OA	25
聖地NOW	26
シリーズ明主様（39）	29
連載『神と繋がる明主様の食事観』（5）	32
箱根美術館休館のお知らせ	34

《令和8年 信仰課題》

魂磨き^{たまみが}

心清めて世を救ふ

尊き神業に^{みわざ}励しめ^{いそ}よ皆^{みな}

【実践の誓い】

- 1 み教え拝読をさせていただきます。
- 2 参拝、浄霊、奉仕をさせていただきます。
- 3 明主様の救いを拡げていきます。

代表挨拶

立石 博

新緑鮮やかな季節となりました。特に雨上がりの日には一層くつきりと感じられ、みずみずしく、心洗われます。

五月一日、箱根神仙郷では「ご面会」、熱海瑞雲郷においては「月次祭」が厳かに斎行されました。私は、それに先立ち四月二三日、会合のため熱海瑞雲郷を訪れました。景観台のつつじは、まだ早いかな、満開かなと楽しみにまいりまし

たが、もうすでに、満開を過ぎていました。早くも花がら摘みの準備作業が始まっていました。聖地職員の話によると、年々つつじの満開時期が早くなっているとのこと。地球規模での気候変動の影響が、聖地にも着実に表れていると実感しました。

春の花 秋の紅葉を^{もみじ}愛づるこそ

神の恵みに^{こと}応ふるなりけれ

私は明主様との出会いがなければ、花に心を寄せたりする感性は育まれず、このお歌の世界とは程遠い人生を送っていたと思います。むしろ、

人の情^{なさけ} 月雪花に^{つきゆきはな}目を外^そらす

人は身魂^{みたま}の低^{ひく}ければなり

こちらのお歌の世界の住人だっと思います。地上天国の雛型である聖地に身を置き、明主様の芸術を愛されたみ心に触れさせていただき改めて感謝を捧げさせていただきました。

連日ニュースから流れる中東情勢は、混迷化・不安定化を増しているようです。戦火の犠牲になられた方々の身魂の安寧と一日も早い戦闘の終結を、心よりお祈りいたします。

しかし、もはや対岸の火事ではなく、地球上に住む私たち一人ひとりが、厳しい局面に立たされていることも現実です。

円安に始まる物価高に、追い打ちをかけるように、電気・水道・ガス・通信・交通といった私たちの日々の暮らしを支える公共料金の値上がりにも不安材料が絶えません。『自分に何が出来るだろうか』と考えた時思い出すのが「景仰」の中の明主様のお姿です。

物は有効に使うもの

「ある晩明主様は、不要の電灯を自ら消されながら、『いらなくなった電灯は、消すことによって必要などころに回されるものだ』とご注意され、何ものも無駄づかいしてはならない。物は大切に有効に使用すべきであることをお示しいただきました。

私はこの心がけを幼児にまで徹底させましたが、今日長じて、すべてに非常なプラスとなっております。」(側近奉仕者)

あれほど大胆な構想のもと、聖地造営そして美術館の建設に必要な数々の美術品の蒐集をされた明主様ですが、ご自身の日常生活においては、これほどまでに節儉・節約に努められたのですね。

MOA美術館収蔵美術品の中で、最高傑作ともいえる尾形光琳作の「紅白梅図屏風」購入の際、間に入った美術商の荻原安之助氏が、「誠のお人」というタイトルで「景仰」に一文を寄せておられます。

「昭和二十九年ですが、その当時の相場としては非常に高い価格でなければ手にはいりませんので、再三再四持ち主に交渉しましたが、なかなか話が進みません。

それで、その事情を明主様に申し上げまして、『いま二、三百万円余分にお出しになれば、お手にはいりますが、お宅さまで二百万や三百万円多くお出しになりまして、なんでもないことかと思いますが、奮発してお買いになられてはいかがですか』と申しましたら、明主様は色をなされ、ご立腹になられて、『私の教団は信者の零細な金を集めてやってるので、そんな大金を軽く出すわけにはゆかぬ』と申されましたので、私は恐縮してだまってしまいました。

明主様は、そういう誠のお人でした」

金額の多寡ではないのですね。まだ戦争の終わらない昭和一九年から聖地建設を始められた明主様。日本全体が大変な経済不況にあえぐなか、何とか明主様のお役に立ちたいと全国の信者さん方が真心の浄財を届けられ、今の聖地があることを私たちは忘れてはならないと思います。

余りに経済状況がひっ迫してくると、我が家も少し献金を減らそうかと誘惑の声が聞こえてくることもあるかと思えます。当時の信者さん方の姿に思いを重ね、『分相応の最大限の誠』の献金奉仕とともに許されてまいりましょう。

どんな集団や組織も一人ひとりの集まりです。したがって、順調な時も不調の時も一人ひとりが節儉・節約に努めることは足腰の強い集団づくりの基本です。家庭も然り、聖地直結

の会も例外ではありません。明主様のお姿に神習い、心豊かに日常生活を送らせていただきましょう。

四月五日、田川布教所にて九州合同月次祭が執り行われました。私にとって代表として初めての布教現場での行事となりました。心地よい緊張感をもって臨みました。田川布教所信徒の真心のおもてなしは、他の拠点から参加された皆さまにかけがえのない感動を提供しました。祭典の中では、田川のA Jさん、広島のア Tさんから感謝奉告をいただきました。私が田川布教所に赴任する前に、広島でご用をいただきましたので、遠路足を運んでくださいました。

「再入信に導かれて」という内容の奉告でした。私は聞きながら、「景仰」の中の話の思い出しました。

迷える小羊への慈愛

「終戦直後、東山荘でのことですが、明主様からお汁粉のごちそうをいただいたことがありました。私は甘党ですから、それが大変おいしかったのですが、一緒に召上がっていた明主様は、私をごらんになって、『もう一杯食べたそうな顔をしているね。だが、やらんよ。信仰を捨ててよそへ行った者が、ふたたび戻って来たのなら、三杯やるがね』とおっしゃいました。

これは「まわり道して、本教のよさが判って、ふたたび戻っ

て来たのだから、そういう人には三杯でも四杯でも振舞ってやるよ」というお慈悲の意味に、私は受取らせていただいています。」(教会長)

何という明主様のご愛情でしょうか。A Tさん親子の再入信を一番喜んでいらつしやるのは、明主様なのだと気付かせていただきました。

今までのご用生活の中で、信仰を離れる方、ご神体をお外にする家庭に、何度も遭遇しました。専従者にとって最も辛い瞬間です。どんな希望を抱いて入信されたのか、どんな歓びの中で神様をお迎えされたのか等々、思いを巡らすと、お世話不足をお詫びするしかありません。もしこのような時、「自分のことではない」との思いがあれば、お世話側としては失格ですね。

人間関係につまずいたり、その時々の特従者との折り合いが悪くなったり、一時的問題で信仰を離れたり止めたりしますが、明主様は、大きな愛情で包んでくださって、ジッと待っていていらつしやるように感じます。もう明主様が嫌いになった、み教えが信じられない、という理由で信仰を離れていく人に私は出会ったことはありません。

また、今回の出来事を通して、M教で悩んでいらつしやる方々の受け皿として、聖地直結の会が存在していることや、その使命を改めて感じました。今までの人間関係を大切にし

ながら、祈り、声かけしていく取り組みを継続させていただきましよう。

A Tさんは脱会の折に、思い切ってご神体や「おひかり」、そしてみ教えもお返しされたようです。娘さんの入信式の時に、私のみ教えをお渡ししました。A Tさんの言葉です。

「私は内心『ドキッ』としたのです。それは脱会した時にすべてを処分していたからです、処分したことで大きな罪だと覚悟していました。大神様、明主様に大変な失礼をしたことで、必ずいつか厳しいお氣付けをいただくことだろうと、内心不安を抱えながら、でも『それは仕方ない』と自分に言い聞かせていました。やがてその思いも忘れかけていたタイミングで再びみ教えを手にならせてもらえるとは夢にも思っていなかったので感無量でした。なんともったいないことか、ありがたさと同時に申し訳なさで心が切なくなり複雑でした。また神様の優しさと恐さも覚えしました」と綴られています。

私自身、この言葉にハッとさせられたのです。大切なものを失って、初めてA Tさんは氣付かれたのですね。自分の身に置き換えると、いつでもあるから、いつでも読めるからと拝読が疎かになり、長らく本棚に積読（ツンドク）になっていたこと、感謝祭が近くなり、お取り次ぎのための拝読になっていたことに、三月号の道に掲載されたみ教えにある『信仰が徹底すればするほど貪るように、読みたくなるもの』——そういう自分なのか、A Tさんの言葉は自分に返す言葉となりました。

《令和8年 信仰課題》

魂磨き 心清めて世を救ふ

尊き神業に励しめよ皆

『実践の誓い』の1に、「み教えを拝読させていただきます」と掲げています。魂磨きの核心部分ですね。一口にみ教えと言いつても、膨大な量です。ご論文・ご講話・ご面会記録・詩歌・「景仰」に代表される時々のお言葉や晩年の明主様のご日課は、本当に分刻み秒刻みでご神業をおすすめるになりました。原稿執筆に関連した挿話では、

より平易な表現へ

「明主様が、御教えとして遺しておられました御論文は、歴大な数になりますが、この御論文は、すべてご口述の形でまとめられるのが常でしたが、口述されたものは自ら加筆され、どう表現したら、もつとも信者にわかってもらえるだろうか」と心を砕かれ、何度も何度もご推敲にられました。

そして、もうこれ以上平易な説き方はないというところまで推敲され、多い時には二十回以上も訂正されることもありました。さらに、その推敲された原稿を、口述筆記のお手伝いをした私に読ませられ、その御論文の内容について、『意

味はわかるだろうか。こういう表現で信者はわかるだろうか。おまえはどうだ』といった調子で、私ごときものにまで批判を求められました。(後略) (側近奉仕者)

これほどまでに心血を注いでお説きになられたみ教えを私たちは寸暇を惜しんで拝読させていただくことが大事ですね。人間の眼から見て不公平なことはたくさんあるように思われますが、神様からすればすべて公平なんですね。私は神様が人間に与えたものの中で一番公平なのが、どんな人にも一日二四時間を与えたということだと思います。時間に大変厳しかった明主様に倣う姿勢で日常生活を送りたいものです。

皆さまも日々時間をうまくやりくりしながら、拝読の時間を作られていることと思います。毎日の生活を見直してみると、いわゆる隙間時間が多いことに気が付きませんか。バスや電車を待つ時間、乗り物に乗っている時の移動時間など。居眠りしたり、ボーっとしたり、スマホをいじったり、人によって過ごし方はさまざまですが、そういう時間というのは、トータルすると結構多いことに気がきます。

私はどこかに出かける時には、必ず「祈りの栞」を持参します。み教えが凝縮されているのがご讃歌だと信じているからです。

以前体験したことです。四〇代半ばの頃です、布教所である中年のご夫婦に入信教修をしていた時のことです。話の途中で、ご主人の方が「この信仰にはよく「真善美」という

言葉が出てきますが、どんな意味なんですか」とのお尋ねでした。私は一瞬戸惑い、すぐに言葉が出てきませんでした。分かっているつもりだったんですね、フツと明主様のお歌だと気づき、「祈りの栞」のお歌を二首紹介させていただきました。ご主人は何回も頷いておられました。私は冷や汗の出る思いでしたが、改めて明主様のお歌のすばらしさを再認識した瞬間でもありました。

真を教へ 善おこなを行ひ美を楽しませ

人導くぞ天国の道

真は道 善おこないは行美は心

培つちかはむとて心砕こころくだくも

真が生む 心は善なり善が生む

形は美なり知れまめひとよ信徒

以前読んだ数学者の藤原正彦さんの著書『日本人の誇り』の中にこんな一説がありました。

「真・善・美は同一のもの

一般に多くの困難を解決しようとする場合、一つ一つ着実に片づけて行こうと誰でもまず考えますが、たいていの場合、労力がかかるばかりで成功しません。いかなる個人や組織で

あろうと、更にはいかなる国、世界であろうと、多くの困難が噴出してきているというのは、それら全てを貫く何か一つの基軸が時代や状況にそぐわなくなっているということを意味します。従ってその機軸を変えることで諸困難を一気に解決する、というのが最も効果的なばかりか容易でもあるのです。そして最も美しいのです。(中略)二十世紀巨星と言われる数学者ヘルマンワイルは、真・善・美は同じ一つのものの三つの側面に過ぎない、と強調していました。(中略)日本人が道徳上の善悪を宗教や論理ではなく、『汚いことはするな』などといった美醜によって判断してきたことに気付いた時、ヘルマンワイルの言ったことが単なる哲学的独り言ではないと納得したのでした。『真・善・美は同じ一つのもの』というのは万物の本質を突いた恐るべき指摘なのです。美しいものを目指すことが万事において真へ達する道であり善に到達する道なのです」

どんな分野の有識者でも真摯に真理を求めていけば必ず明主様の説かれた真髄に近づくのだと、当時感銘を受けたので紹介させていただきました。

今年も大きな節目である地上天国祭が近づいてまいりました。明主様は、『神仙郷地上天国の大いなる意義』『天国の礎』(芸術24頁)のご論文で、このようにお説きになっています。

「今度神仙郷地上天国が完成したという事は、世界の中心に

愈々地上天国が生まれた訳で、言わば地上天国の誕生であるから、世界肇つて以来の一大慶事であり、未来永劫に亘つての世界の大祝祭日である訳で、この六月十五日は将来の地上天国誕生祭という事になるであろう。処で茲に重大な事を告げたいのである。それは今日を契機として霊的活動が促進され、此処を中心に左進右退のリズムの大渦巻が、徐々として世界的に大変化を齎すであろう事で、これこそ世界の立替立直しである」

一年の丁度折り返し地点にあたるこの時期に地上天国祭をお迎えするのも、深い意味があるのだと思います。今年前半の自分自身を振り返り、信仰の棚卸をさせていただきましよう。

また、この五月一七日には、京都平安郷で「明主様と聖地に直結する会」の全国信徒集会を開催します。四月末現在、約一五〇名の参加申込みをいただいています。

「道」四月号で申し述べましたが、今後の当会の在りよう、方向性について、忌憚のない率直なご意見を賜る、有意義な場になるように願っています。どうぞよろしくお願いいたします。

感謝奉告

結婚50年、感謝の信仰生活

土佐みろく教会

K R

明主様よりいただいた気付きと学び、そのことによつていただいたご守護のご奉告をさせていただきます。

昨年、主人は随分前に患った、腰のヘルニアの痛みが再度起こり、診察を受けたところ「圧迫骨折」と診断されました。経過を看ながら過ごしてはいましたが、痛みは治まることなく、逆に検査をするごとに圧迫骨折の箇所は腰から上にかけて増えていきました。

痛みはありながらも、畑仕事や家のことなどは何とかこなすことはできていました。あまりに長く、そして、だんだんと骨折の箇所が増えていくようすに、明主様から「何か気付きなさいと言われているような、また、何か至らないところがあるのだろうか」と、夫婦で話し合いました。しかし、答えは見つかりませんでした。このようなご浄化をいただきながらも、年末を過ぎし新年を迎えることができました。

一月に入り、昨年、長年私たちをお世話くださった所長の退職に伴い、先生と毎月させていただいていた勉強会を、今年からどうしようかと地域長会で話し合った結

果、「継続していこう」ということになりました。以前のようににはまいりませんが、それぞれが思うことや感じていること、時には抱えている悩みや問題を出し合い、貴重な気付きと学びをいただける機会となりました。

その日、勉強会を終え帰宅すると、主人が「腰の痛みがなくなった」と驚きと喜びの話をしてくれました。よく聞いてみると、主人は毎朝、神様にご挨拶をさせていただく際、今までは「お願い」をしていたそうです。しかし、「お願いばかりでは申し訳ない、まずお礼を申し上げよう」と、そういう気持ちにならせていただいた」と、話してくれました。

明主様がご用意くださった勉強会の継続、そして、主人の気付き、それ以外のいくつものことが連なりあつての出来事なのだと感じさせられました。

さらに、驚きと喜びは続きました。主人はヘルニアの前に大病をしてから、一年に一度MRIの検査をしており、今年もその検査を受けました。検査の結果は「異常なし」とのこと。さらに、腰から上に続いていたはずの圧迫骨折の痕が跡形もなく消えていたのでした。

「確かに昨年の検査の時はその痕があったはずなのに」これには夫婦で目を疑い驚かされ喜びを分かち合いました。

この一連のご奉告を、昨年一二月から新たに担当してくださり、定期的に土佐に出向くださる先生に報告させ

ていただきました。そして、ご自身が感じられたことや気付かされたこと、これまでに自身が教えられ学んだことなどを話してくださいました。先生自身、私の話を聞いて、「何か温かい気持ちにさせていただきました。ありがとうございます。」とございます。Kさん、今の私の話お聞きになられて温かくなられませんでした？」と尋ねられ、私は「身体の芯まで染み入るような温かい気持ちになりました」と言葉が出ました。

すると、「これが、昨年皆さんにお渡しさせていただいた今年の当会、グループごとの信仰課題のみ教えやお歌、具体的な営み、その一つにあった温かな想念の世界みたいですよ。昨年、当会が一年間大切にさせていただいたみ教え、包括世界救世教から発行された『大経論』二一号、また、『明主様に倣いて』の一番初めにも掲載されている『私というもの』の明主様のお姿に倣わせていただく世界みたいですよ」と話してくださいました。

この度のこと、それを学び合う中で、今までにないことを気付かされ感じさせていただくことができました。昨年夫婦で話し合い、答えが出なかったことにも答えをいただいたように思います。

それは、「気付き」というと間違いや改めることと思いがちでしたが、すべての人が明主様とともにあり、私たち一人ひとりが明主様のみ心の中にあるということなのだと言いました。そして、信徒は明主様にお仕えしている

のだから、誰もが明主様のみ手足、お道具として生かされているのだと感得しました。「すべての人が大神様の光と愛に包まれている」——だから、すべては明主様のみ心の現れだと受けとめ、その想いにお応えさせていただくことが大切なのだと言いました。主人が腰から上にかけて圧迫骨折していったことも「浄め」であり、その浄めによって、ご先祖さま、私たち夫婦や家族、そして身近な人たちや関わるすべての方々の救いにつながっていることを覚らせていただきました。また、ご近所の方の出来事も他人事といふことで終わらせず、光と愛をお届けさせていただくことが大切で、それが「救い」となっていくということをお話してくれました。主人が「お願いからお礼」と話してくれた信仰の革正に、それが結果として、この度のことすべてが浄めであり、ご守護とさせていただけるように明主様にお導きいただきました。

私自身、約五年前から主人を、責めたり、咎めたり、裁いてしまう世界から、寛容に受け入れる世界へと大きく転換するお許しをいただきました。すると、不思議に愛おしい関係へと導かれるようになりました。主人と結ばれ五〇年、長い時間はかかりましたが、明主様が私たちを温かく見守りくださり導いてくださいました。

私たちグループにいただいた名前に対応しいご用と、その道にお仕えさせていただきたいと思えます。

明主様ありがとうございます。

感謝奉告

すべて明主様のお導きと感謝

伊丹グループ I S

日々の感謝を報告させていただきます。

はじめに、主人が帰幽して今年で四年になります。五十日祭までの営みをはじめ、その後もいろいろとお導きいただき、現在も日々穏やかに過ごさせていただいております。主人に守られていることを感じながら生活できていることを、日々ありがたく思っております。

また、自宅を集会所として使っていただくようになり、人の出入りの中で信仰生活をさせていただいていることにも、感謝に堪えません。

昨年九月末、浄霊会の日朝、ゴミ出しに行った帰りに階段の三段目から落ち、尻もちをつきました。その際、右手で身体を支え、その時は「大丈夫」と思っただけ、そのまま浄霊会をさせていただきました。しかし、時間が経つにつれて右手が腫れてきました。翌日は、いづのめ教団十三浄霊センターの感謝祭でしたが、当日の朝、いつも車で送ってくれる甥に電話し、ご参拝は欠席させていただくことを伝えました。甥は感謝祭を終えてから立ち寄ってくれ、病院へ連れて行ってくれました。診察の結

果、骨にヒビが入っていることが分かり、ギプスをする事になりました。その後の生活では、甥や姪をはじめ、多くの方々に助けていただきました。姪には長い期間にわたり、病院の送り迎えと入浴をサポートしてもらい、また買い物などいろいろな手伝いをしてくれ、本当にありがたく思いました。また、同じグループのMさんご夫妻にも、一〇月の間、まだ暑い中を歩いて週二回来てください、ご浄霊や家事の面で助けていただきました。さらに、怪我が治った後も、月に一度の主人の墓参りの際には、姪が車で送り迎えをしてくれるようになり、これから先も安心してお参りができることを大変ありがたく感じております。この怪我を通して、それまで気付かなかった周りの方々からの支えや、人とのつながりのありがたさを、しみじみと感じさせていただいております。

療養中には、奈良の弟から「元気なうちに遺言書を書いた方が良い」と言われ、青天の霹靂、それまでそのようなことを考えたことはありませんでした。私は主人が亡くなってから一人暮らしで、実際に生活の中で甥や姪にもお世話になっただけで、遺言書を書くことができませんでした。もしこの怪我がなければ、ここまで整理することはできなかったと思います、これも一つのご守護であったと感じております。

一〇月には、自宅に西村先生をお迎えして、集会をも

ちました。怪我のため準備ができないことから、一度はお断りしようと思いましたが、門塾先生から「できる範囲で良いですよ」とおっしゃっていただき、「それならば」と決心してさせて頂きました。当日は、同じグループの方々が生花や会場準備など、いろいろと協力してください、無事に終わることができました。また、ギブスも当初は一ヶ月くらい着ける予定と医師から言われていましたが、相談したら、西村先生をお迎えする前日に外すことができ、その二日後には、私のために親族が用意してくれた喜寿の祝いにも支障なく参加することができました。こうしたことも、ありがたいご守護と感じております。

一月末、眼科の検診に行った際、「両目とも目の奥に出血がある」と言われ、その場で血圧を測ったところ、非常に高い数値が出て、自分でも大変驚きました。それまで血圧を測ったこともなく、あまり意識したこともなかったため、「自分は何も知らないまま過ごしていたのだ」と感じました。その流れで外科や内科を受診し、血圧を下げる薬を服用することになりました。

その後、三ヶ月ほど薬を服用し、血圧は下がってきていましたが、「なぜ薬を飲み続けるのか」という思いが出てきました。検査でも異常がなかったこともあり、最終的には自分の判断で薬をやめる決心をいたしました。

その結果とともに、薬をやめたことを門塾先生と西村先生にラインで報告いたしました。その際、門塾先生からは温かく受けとめていただく返事をいただき、西村先生からは「それは難しい選択ですね」との返事をいただきました。

私はこの西村先生の返事を受けて、初めて血圧というものの重大さを強く感じました。それまではどこか軽く考えていた自分があったのだと思います。「このお言葉は、自分のことを思っただけでございまして、このお言葉は、素直に受け取ることができ、そのことが自分の信仰への向き合い方を見直す大きなきっかけとなりました。また、この間も西村先生、門塾先生に継続してご祈願をいただいていたおり、そのことが大きな支えとなっておりました。しかし、その返事をいただいた時はいろいろ考え込んでしまい、不安な気持ちの中にいました。その時に、武田先生から「近くにいますので寄らせてもらっても良いですか」とお電話をいただきました。このタイミングの良さに本当に驚き、「これは明主様がそうしてくださいだったのだ」と感じました。その後、ご浄霊をいただき、目や血圧のことについてのみ教えも教えていただき、たいへんありがたく思いました。その際、自分の状況をお伝えすると、「私もご祈願させていただきます」と言ってくださり、そのお心遣いにたいへんありがたく、心が軽くなる思いがいたしました。

この一連の出来事を通して、自己浄霊に対する向き合い方が変わりました。それまでも行っておりましたが、「より真剣に取り組まなければならない」と感じ、時間を増やして取り組むようになりました。

薬をやめてからは血圧の変動があり、安定しない状態が続いております。また、ふらつきを感じることもあり、自分の中に不安や弱さがあることにも気付かされました。特に眼科の検査の前には血圧が上がることもあり、自分でも「やはり心配しているのだな」と感じました。本来はすべて神様のご守護と思いますが、実際にはそう受けとめきれない自分がいることにも気付かされ、「まだまだだ」と思いました。

それでも、薬をやめて二ヶ月後の眼科の検査では、メガネをかけての視力は、右目が一・二、左目は、もともと一・〇でしたが、目の出血からはずっと〇・八だったのが〇・九へと回復しておりました。わずか〇・一の変化ではありますが、自分にとってはたいへん嬉しく感じられました。また、検査の前日にも武田先生がご浄霊に来てくださり、その流れの中で守られていることを感じさせていただきました。

怪我を通して人とのつながりに気付かせていただいたこと、遺言書という形で将来の不安が軽くなったこと、西村先生からのご連絡で、自分の状況について自覚が深まり血圧の大切さを知ったこと、各先生方から継続して

祈願していただいていること、不安を感じている時に武田先生が来てくださったこと、これらすべてがつながり、自分の信仰の在り方を見つめ直す機会となりました。

また今回のことで、ご祈願のありがたさを、改めて実感いたしました。自分一人では不安になってしまうような時でも、ご祈願をしていただいていると思うと心が支えられ、その中で導きをいただいていることを感じさせていただきました。

現在も血圧は安定しているとは言えず、自分の弱さを感じることがありますが、やはり「ご浄霊にお縋りしていくしかない」と感じております。

これからも自分の体験を通して学ばせていただきながら、ご浄霊のありがたさをお伝えできるよう努めてまいりたいと思います。この度のご守護に心より感謝申し上げます。

ありがとうございました。



瑞雲郷の藤

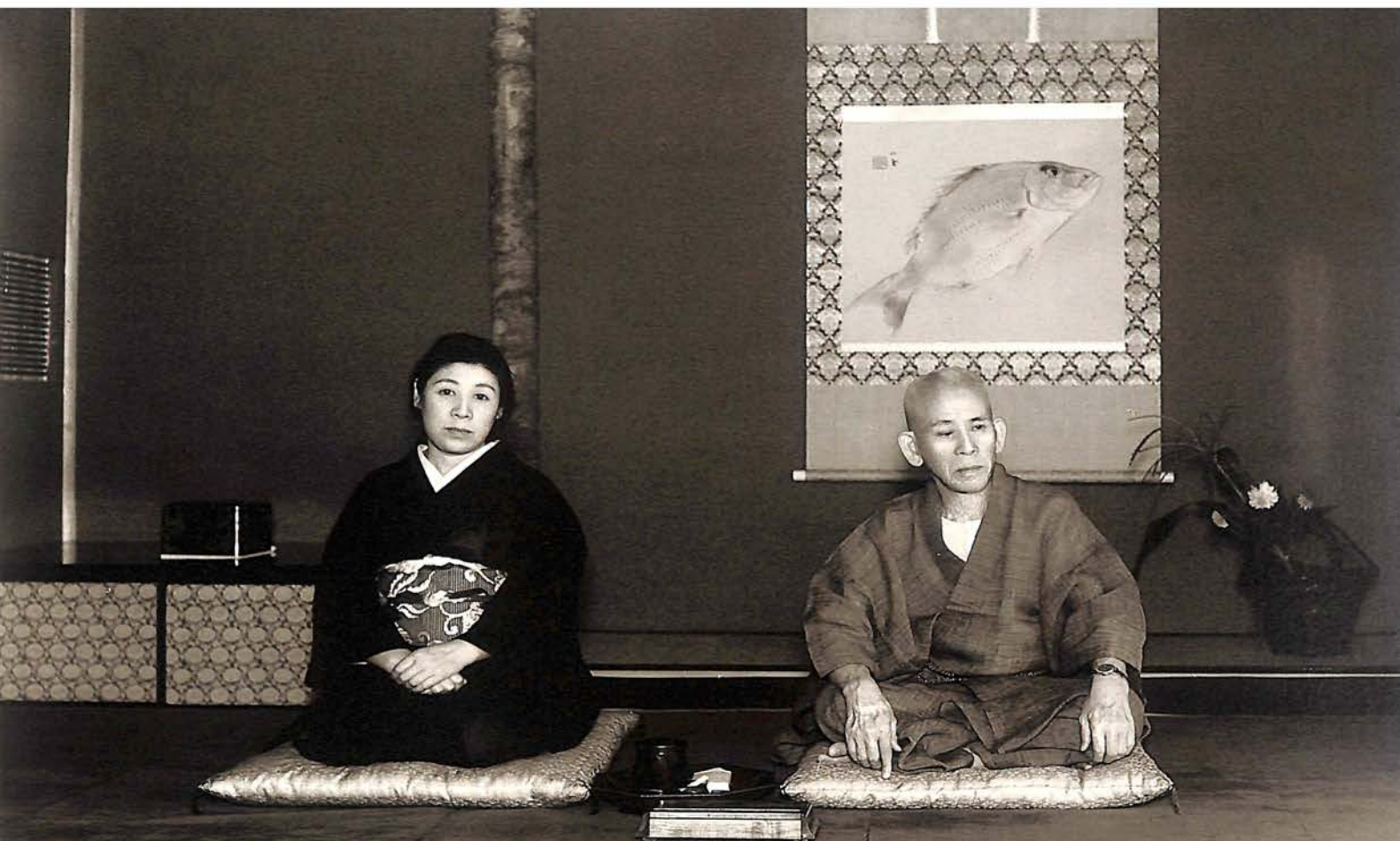
観山亭

観山亭は、明主様が箱根・強羅に移られて最初に手がけられた建物であり、神仙郷の中心をなす存在です。戦中戦後の厳しい状況の中、多くの信徒の奉仕により、昭和二十一年八月一五日に完成しました。こけら板葺きの数寄屋造りで、室内からは明星ヶ岳など箱根の出々を望むことができ、その眺望にちなみ命名されました。この建物はご神業の場として用いられ、多くの会談やご論文の推敲が行われました。建設にあたり、明主様は「この観山亭で、わたしは仕事をする。これができあがると、それだけ人類が救われるのだ」と仰せられています。また、「日本は世界の公園になるのがその使命であり、その中心が観山亭である。ここから地上天国が広がっていく」と、その重要性をお示しになりました。完成後、数寄屋建築家・吉田五十八により増築が行われ、意匠がさらに高められました。令和七年、隣接する観山亭湯殿とともに国の登録有形文化財に指定されました。

観山亭
KANKAN DO



観山亭前にお立ちになれる明主様(昭和28年 映画「東方之光」より)



居間に座される明主様と二代様(昭和21年8月)



ルーム(書斎)にてご論文を推敲される明主様(昭和28年夏)



居間



ルーム(書斎)



観山亭の全景



明主様が寝室として使用された竹の間

日光殿

日光殿は、ご面会所として昭和二三年に着工し、翌年五月に完成した建物です。

設計は数寄屋建築家・吉田五十八によるもので、秋田杉を用いたこけら葺きの意匠を特徴とし、最大千人を収容できる大規模な建築です。当初は「早雲寮」と名付けられましたが、昭和二五年に「日光殿」と改称され、その後、規制緩和に伴い増改築が行われ現在の姿となりました。

日光殿は、信徒とのご面会の場であるとともに、芸能や映画の上映など文化活動の場としても用いられました。明主様は「日光殿は演芸をやる処です——芸能のですね。つまり、地上天国の芸能をやる処です」と仰せられ、文化芸術を通じた人々の交流と楽しみの場として活用されました。また、前庭には巨岩を配した池や滝が設けられ、神山荘や早雲山を望む景観と一体となった空間が形成されています。

令和六年、国の登録有形文化財に指定されました。



日光殿でのご面会のようす



日光殿全景



新文明の創造に向けて決意を捧げた



着々と進む光明会館の建設

大のひな型から個と家へ

(箱根) 5 月度ご面会

5月1日、光明神殿にてご面会が執り行われた。中島MOA理事長は、光明会館建設の進展と内覧開始に触れ、箱根の建設が「大のひな型」として社会に広がり、「個と家」の実践へ反映している現状を示した。神仙郷やMOA美術館の取り組み、海外連携の進展にも言及し、明主様のみ心が具体的に現れていることを強調。さらに、浄化療法の実践を通して、一人の幸せを願う関わりが地域へ広がる姿を紹介した。また、浄霊は幸福を生む根本の方法であり、人生を変える力であると取り次ぎ、「心身ともに健康な人づくり、まちづくり」の推進を呼びかけた。



明主様に倣い、さらなるご神業奉仕を誓う



藤を添えて拝観者を迎える水晶殿



山月ホールにて生花を觀賞する参拝者

(熱海) 5 月度月次祭

浄化に込められたご神意

5月1日、雨に包まれる中、救世会館にて月次祭が執り行われた。杉原いづのめ教団理事長は、み教え「御神意を覚れ」を拝し、人は地上天国建設の使命を担って生まれてきた存在であると強調した。また、浄化は偶然ではなく神の愛による働きであり、迷わず受けとめることで大きなご守護へとつながると述べた。さらに、明主様のご生涯における度重なる浄化を通して、浄化は救いへ至る過程であるとして取り次ぎ、み教えの確かさとその奥深さを示した。そして、ご神意を受けとめ、感謝をもって使命を果たしていく歩みの大切さを強調した。

感謝奉告

夫婦で歩んだ信仰とご縁の結実

伊丹グループ OM

私は約五〇年前、体調を大きく崩し、寝たきりに近い状態となりました。そのような中、信徒の方が見るに見かねて、身の回りの世話や食事の支度までしてくださり、さらに浄霊を取り次いでいただいたことが、信仰との出会いとなりました。

当時、主人は他人が家に入ることを好まない性格であり、信仰に対しても否定的でした。しかしそのような中でも、Mさんや長尾先生が主人の不在時を見計らって通ってください、根気強く浄霊を取り次いでくださいました。長尾先生は私の状態をご覧になり、「『おひかり』をいただければ自己浄霊ができ、必ず明主様が助けてくださる」とお導きくださいました。本来であれば西宮市城山の教会まで自らいただくに行くべきところを、私の体調を案じて代わりに受けてきてくださり、そのまま床に伏せた状態の私にご下付くださいました。

その後も浄霊を続ける中で、医師からは三叉神経の大手術を勧められましたが、長尾先生より「手術はせず、明主様にお任せしなさい」とのお言葉をいただき、浄霊

を実践し続ける中で、長い年月をかけて元気な身体に導いていただきました。

回復後は、「助けていただいたのだから、今度はご用をしなさい」とのお言葉をいただき、毎日布教所に通い、食事のご用をさせていただくようになりました。

献立も自分で考え、「『ぜひこれを食べていただきたい』という真心をもって取り組むように」とのことで、信仰を生活の中で実践することを学ばせていただきました。

そのような中、主人にも転機が訪れました。私の回復を目の当たりにしながらも、「自分は信仰しない」と言っていた主人でしたが、長尾先生から「夫婦のつながりが大切であり、あなたが浄霊を取り次ぐことで奥さんはさらに良くなる」と強く勧められ、「おひかり」をいただくこととなりました。それをきっかけに、主人も徐々に信仰に向き合うようになり、やがては自ら進んで浄霊を取り次ぐようになりました。さらにご神体や「みたまや」もいただき、家庭の中にも信仰の中心が据えられていきました。

その後、主人は椎間板ヘルニアという大きな浄化をいただき、手術が必要とされる状態となりましたが、多くの信徒の方々が交代で浄霊に来てくださり、浄霊を受け入れる中で回復へと導かれました。この体験を通して主人は、「この信仰は本物である」と深く確信するようになり、以後は私以上に熱心に信仰に取り組むようになりました。布教所の男子会の活動にも積極的に関わり、教団

の困難な時期には先頭に立って布教所を守るなど、強い信念をもって歩ませていただくようになりました。

また、仕事においても試練をいただく中で、主人が職場で強いストレスを抱える状況となり、私は「どうか主人をお救いください」との思いで祈願書をお出ししました。ところが長尾先生より、「それは身内だけを助けてほしいという祈りであり、利他愛の心が無い」と厳しくお叱りをいただきました。当時は入信して間もなく、その意味を十分に理解することができませんでした。このご指導を通して、祈願とは自分だけの救いを願うものではなく、関わるすべての人が良くなることを願うものであると教えていただきました。その後は、主人にも「職場に入る時には、周囲の方々が良くなるようお願いしながら過ごしてほしい」と伝え、実践していく中で、職場の間関係や環境が和らぎ、主人自身も働きやすくなってくという体験をさせていただきました。

このように、夫婦ともに信仰に導かれ、守られて歩んでまいりましたが、一昨年、主人は帰幽いたしました。

円空仏に魅せられて

その後、遺品を整理する中で、主人が長年にわたり一刀彫の仏像を彫っていたことを初めて知り、大きな驚きとともに深いご縁を感じました。

主人自身が円空仏に特別な関心をもっていたかどうかは定かではありませんが、岐阜へ同行し、ともに仏像を見ていたことを思い返すと、どこかで通じるものがあったのではないかと感じております。

一方で私は、長年趣味として写真撮影を続けておりましたが、長女が岐阜羽島に嫁いだことをきっかけに、道端や寺院に佇む数多くの仏像に目が留まるようになりました。『なぜこの地にこれほど多くの仏像があるのか』と疑問に思いながら撮影を続ける中で、それらが円空上人による仏像であることを知り、次第に強く心惹かれていきました。

当初は撮影が許されていない仏像も多くありましたが、「それほど関心があるのなら」と特別に許可をいただけるようになり、さらに別の寺院をご紹介いただくなど、ご縁が次々と広がっていきました。お世話になっていたプロのカメラマンの方にもそのことをお話ししたところ、「せっかく本物を撮らせていただけるのなら、完璧なものを撮らないと失礼だから、僕がついて行ってあげる」と言ってくださり、ご協力を得て照明や構図にもこだわりながら、数年にわたり撮影を続けさせていただきました。また、円空上人のゆかりの地を巡る中で、生誕地の羽島から最期を迎えられた弥勒寺までご縁をいただき、仏像だけでなく、その生涯そのものに触れさせていただいたような思いを抱かせていただきました。

こうした積み重ねの中で、長女より「これだけのご縁

をいただいたのだから、ぜひ個展を開くべき」と強く勧められました。さらに、主人が遺した仏像の存在も重なり、「主人もきつと喜んでくれる」と背中を押される形で、個展開催へと心が定まっていきました。

開催に至るまでには約二年を要しましたが、その間も明主様にご奉告申し上げながら準備を進めさせていただき、体力面での不安を抱えながらも、日々守られて無事に当日を迎えることができました。

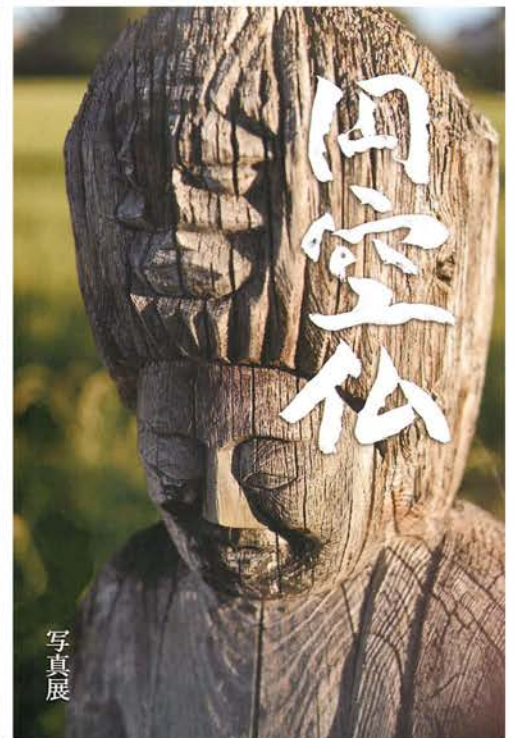
完成した作品を拝した時、これまでの信仰の歩み、主人とのご縁、そして円空仏との出会いのすべてが一つに結ばれ、「よく頑張ったね」と明主様よりお声をかけていただいたような思いをいただき、深い感謝の念を抱かせていただきました。これまで導いてくださいましたすべてのご縁に心より感謝申し上げますとともに、今後も明主様のみ心になう歩みを続けさせていただきたいと願っております。ありがとうございました。



○さん近影



開催された写真展のようす



感謝奉告

生涯を通してのご守護に感謝して

東大阪グループ O A

これまで感謝奉告させていただいておりました、弟の孫・MRの件についてご報告申し上げます。

四月二六日午前二時二二分、Rが帰幽いたしました。

二歳一ヶ月、精いっぱい生き抜いてくれました。

Rは、出産時の経緯により脳に重い障害を抱え、いわゆる植物状態で生まれました。医師からは「ここまで命が続くことはほとんどない」と言われ、また人工呼吸器を外すことも提案されるような厳しい状態でした。家族は、命ある限りともに過ごす道を選びました。親族一同が何度も病院や施設に足を運び、Rを囲みながら日々を過ごしてまいりました。

その間、先生方をはじめ、多くの信徒の皆さまにご祈願をしていただき、さらに聖地でもご祈願をお取り次ぎいただきました。私自身、何もできない中で、皆さまのお力添えにどれほど支えられたか分かりません。本当に感謝しかありません。

Rは成長とともにさまざまな身体的な困難も抱えながら、それでも懸命に生きようとしてくれました。



ご家族・ご親族でのお花見のひととき

同じグループの皆さまといづのめ教団東大阪浄霊センターの皆さまが心を込めて折ってくださった千羽鶴にも、家族一同どれほど励まされたことか計り知れません。そして最期を迎える少し前、Rを初めて外へ連れ、家族・親族一同で桜の下、お花見をさせていただくことができました。それは最初で最後の家族全員でのひとときとなりました。

その三日後、Rは自然な形で旅立っていきました。この一連の出来事は、ただの偶然ではなく、神様のお計らいとしか思えません。Rは短い命ではありますが、多くの人の祈りと愛に包まれ、私たちに大切なことをたくさん教えてくれました。そして今は、霊界においてお母さんとともに安らぎの中で幸せに過ごしていることと思います。

これまでご祈願くださった先生方、信徒の皆さま、本当にありがとうございます。心より感謝申し上げます。

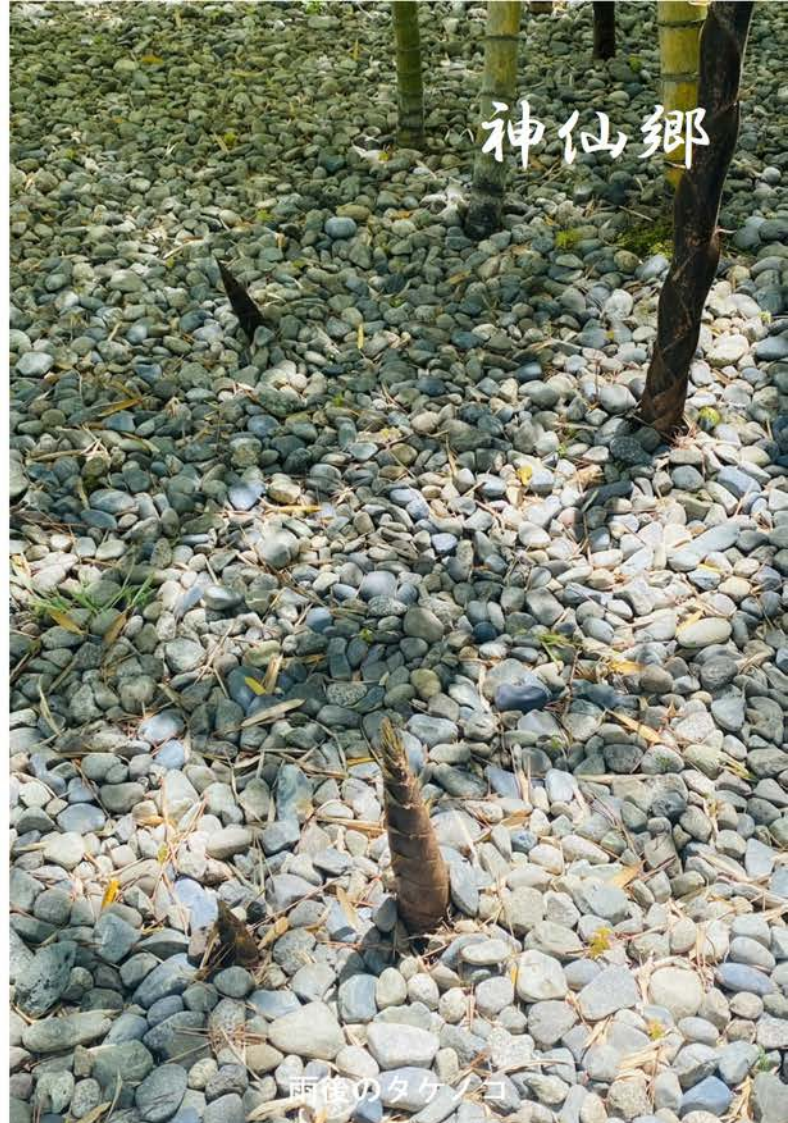
大神様、明主様、これまでのご守護、まことにありがとうございます。

NOW



満開のシャクナゲ

神仙郷



雨後のタケノコ



新緑とつつじが調和する苔庭

瑞雲郷

聖地



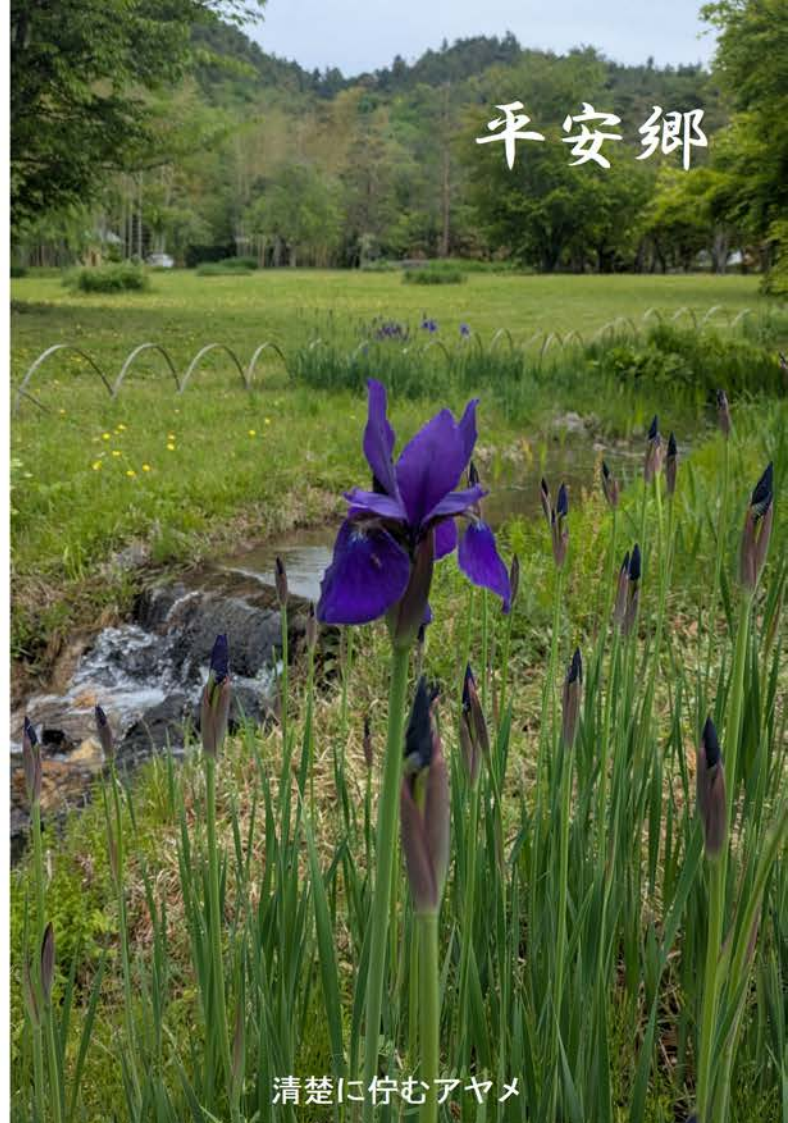
満開のつつじに囲まれる景観台から熱海の市街を望む



三叉路から仰ぐつつじ山と水晶殿



水辺に咲くイチハツとサギ



平安郷

清楚に佇むアヤメ



満開を迎えた鏡池の藤

立教のそなえ 「千手観音像」

昭和九年（一九三四年）一〇月一日午後二時ごろのこと、
東光男あずまみつおという写真家が初めて応神堂を訪れた。教祖はその
名刺めいしを見て、「神業に係のある面白い名前だ。」と興味を覚
え、さっそく面会したのである。

すると東は、その日教祖をたずねるにいたった経緯けいゐを縷々るる
（あれこれ、こまごまと）述べ始めた。

大正時代の初め、東は中国旅行をする途中、縁あって道教
の信者となったが、ある時、神憑りかみがかりとなり、

「今から二〇年後に日本に観音力をもった人が現われる。」
という神託しんたくを得た。その後日本へ帰り、ひそかに時を待つて
いたところ、その年（昭和九年・一九三四年）の春、すでに
自分の家の東方に観音力をもった人が出現しているという霊
感を得た。そこで自宅のある渋谷の東方にあたる赤坂、麴町
あたりにそのような人物がいまいかと、探し求めていたとこ
ろ、たまたま麴町の知人から、

「平河町に観音様の力で病気を治す人がいるからたずねて
みなさい。」

と教えられたというのである。教祖は東の探す相手がほかなら

ぬ自分であることを確信し、なお一時、宗教的な語らいをした。
そして、話を終えた帰りがけのことであった。東は教祖の姿を
写真に撮影さつえいさせてほしいと頼んだ。そこで教祖が快く承知する
と、床の間へ坐るように言つて写真を撮り、帰っていった。

その翌日のことである。東は、

「こんな不思議な写真ができました。」

と言つて乾板かんばんに焼き付けた写真を持参した。それは教祖の左
脇腹のあたりから白色の明るい煙のようなものが立ち上つて
頭上に広がり、その中に千手観音の画像が現出する神秘的な霊
写真であった。

教祖は前日、床の間に坐つた時に、すでにある種の予感を感じ
ていたが、やはりこの写真には目をみはらざるを得なかつ
た。それまでに欧米諸国や日本の霊写真を数多く見たことが
あつたが、多くは人間の死霊である。まれにキリストの写つた
ものがあつても、トリック写真であることが歴然としていた。
しかしこの霊写真の真実性は疑いようがなかつた。そして、い
ずれか、さだかでない遠方に実在する画像を一瞬いつしゆんのうちに写
し出すその力が、今後どのような奇蹟を現わすことになつて
いくのか、それを思えば無限の希望がふくらむのであつた。

教祖が浄霊や祭典など忙しい間を縫つて、連日のように金
高の家へおもむいて絵筆を執つていたのは、観世音菩薩の霊
写真の神秘があつた、ちようどそのころであつた。霊写真が
届けられてから、一週間後の一〇月一九日の『日記』には、

応神堂早く済みけり金高へ観音描きに行きけるかな

とある。ところがその翌日になって一大事が起きた。金高真城の夫の公義きみよしが酒に酔って帰り、三分の一くらいできあがった画像をズタズタに切ってしまったのである。

千手観音描く半ばに金高の主人破りしと語りたりけり

知らせにより駆けつけた教祖は、丹精たんせい込めて描いていた観音像の無残むざんな様子にしばらく茫然ぼうぜんとしていたが、その時ふと霊写真に思いあたることがあった。なかば近くまでできあがった観音像が破られるからには、それなりの理由と意味がなければならぬはずである。しかも立教な成ったうえは、新教団の神体にと信じて描き続けてきた画像である。軽々けいけいな理由からであるとは思われない。

教祖は当初、古い時代の観音画像の粉本ふんぽん（後の制作や研究のために僧侶そうりょなどが模写した画像）を参考に描いていたが、そのような画像には、観世音菩薩が満足せず、霊写真に現出した姿を手本にして、新たに書き直すよう命じられたのではないのか。そのように思いを潜ひそめて考えると、今回のことは不祥事どころではなく、むしろ感謝しなければならぬと感ずるにいたったのである。

こうして、初めの画像では顔の周囲に限られていた円光は全身大に拡大され、雲の上から岩上に座した姿となり、髭ひげも

ない若い容貌ようぼうの観世音菩薩像が揮毫きごうされることとなった。

描き直された新たな観音像は、より躍動的やくどうてきで、大規模な救世の業わざが天上ではなく、この地上に具現けげんされるという経綸けいりんを、一層はつきりと象徴するものとなったのである。

下絵を作り直し、筆や筆洗ひっせんも新しく整ととのえて、ふたたび描画に取りかかったのは、一月五日のことであつた。同日の『日記』に、

千手観音二度目の画像金高の三階に描きはじめし今日かな

と詠よんでいる。そして一月一七日、ついに大作の千手観音の尊像は完成したのである。

千手観音漸ようやく今日の夜遅く出来なして心足たらへり

なお、東光男による教祖の霊写真、この千手観音のほか二枚残されている。どちらも初めの霊写真から一〇日たった一〇月の二日に撮影をしたもので、そのうちの一枚は、端座たんざ、合掌がっしょうしている教祖の周囲に、鮮あざやかな円光が出現しているもので、円光から発した強烈な光が室内に満ちて、座蒲ざぶ団どんと水盤すいばんのほかは朦朧もうろうと霞かすんでいる。残りの一枚は睡気ねむけを催した教祖が、前のテーブルにうつぶせになって居眠りをしているところを撮とった写真であるが、その頭上には龍が峙とどろを巻いて首をもたげ、しかもその龍体からは幾条もの光が発散しているものである。教祖はそれが金龍神であると直感した。



霊写真。上部に千手観音が写っている

東光男は鋭敏な靈的感性のもち主で、ときおり平静な様子
のまま神憑りになり、瞑目して何ごとか自問自答することが
あった。それは靈感が訪れているしるしである。東は龍神の
霊写真について、

「先生には龍神さんが守護しておられますね。なぜかとい
うと、いつも先生と面接する時はかならず小雨が降るんです。
これは龍神が守護している証拠です。今晚も先ほど、雨が降っ
てきたので、きっと龍神が写るかもしれないと思って撮った
のです。」

と述べたのである。

千手観音の霊写真について、立教後発行した機関誌『光明
世界』第一巻第一号、昭和一〇年・一九三五年・二月四日発刊）
につぎのような解説が掲載された。

「此の霊写真は昭和九年（一九三四年）十月十一日午後三時
半、麴町区平河町一丁目二番地、応神堂二階床の間（九尺）に
於て岡田仁齋先生（教祖）が正座されたる所を心霊写真の研
究家、東光男氏が撮影したるものにして何等の予期なき偶然
の現象なり。然し、当時、仁齋先生は千手観音の大幅画像を
描筆し始めし時なり。斯くの如き現象は恐らく世界空前の事
なるべく斯界に一大問題を提供せるものと謂ふべし。」

* （ ）内は編集者・挿入

** 二・七メートル

次号に続く『東方之光』（上巻）より

神様から授かった「味わい」

（株）瑞雲 代表取締役 堀口照正

明主様の食事観において最も大切なことの一つは、次のような受けとめ方ではないでしょうか。「食べ物とは、神様が人間を造ると同時に用意された、生きるために必要なものである。私たちが美味しいと感じ、その時に欲するものこそが、健康に生きるための食べ物である」という視点です。

私たちは「神の代行者」として、神様が用意してくださった食べ物を神様とともに食させていただいている――。そうした謙虚な姿勢で、一口一口を丁寧に感謝して味わうことは、神様とつながるための大切な営みなのです。

明主様は昭和一七年に著述された『明日の医術』の中で、次のように示されています。

「食物とは何ぞや、いう迄もなく人間を初め凡ゆる生物を造られた造物主が、その生命を保たしむる目的を以て、それぞれその生物に適合する食物を与えられて

いるのは自明の理である。故に人間には、人間が食すべきもの”として、大体定められているのである。そうして如何なる食物が人間に与えられたるものでありやを知るべきであるが、之は洵に容易な事である。何となれば、その条件として『味わい』なる要素があるから、それによってよく分るのである。即ち、造物主は人間に対しては、味覚なる本能を与え、食物には『味わい』なるものを含ましてある。

此理に由って、すべての食物にはそれぞれの味わいがあり、それを楽しみつつ食する事によって栄養となり、生が営まられるのである。故に、ビタミンがどうの蛋白質がどうのなどという事は、何等の意義をなさないのである」（『明日の医術 第二篇「栄養学」昭和17年9月28日）

ここで明主様は、私たち人間もあらゆる生物も造物主によって造られた存在であること、そして、その生命を保つためにそれぞれの生物に適合する食物が与えられているという理（ことわり）を明確に示されています。さらに、人間には「食すべきもの」が定められており、その見分け方こそが「味わい」であると教示されました。造物主は私たちに本能として味覚を授け、食物に「味わい」を含ませてくださったのです。

人間がもつ本能は生存に直結した欲求であり、その

一つに「食欲」があります。

一般的に味覚は、甘味・塩味・酸味・苦味・うま味の「五基本味」に分けられます。これらは年齢や生活習慣、その時の体調や精神状態によつて感じ方が変わるものです。この「味わい」を神様から授かった条件として受けとめることで、その時々には自分の身体が本来に求めているものを、正しく感じ取れるようになるのだと考えられます。

また「美味しい」と感じる要素は、味覚だけではありません。

旬の食材そのものの香りや調理の香ばしさを楽しむ「嗅覚」。歯ごたえや喉ごしを楽しむ「触覚」。料理の彩りや盛り付け、食卓の花、器、部屋のしつらえを楽しむ「視覚」。そして、噛む時の音や調理の音を聴く「聴覚」。食事はまさに五感をフル活用して楽しむものです。

さらに内面的な喜びとして、香りが呼び起こす懐かしい思い出や、ともに食卓を囲む相手との楽しい会話も、大切な「味わい」の一部です。

食事は芸術的な感性を高め、靈性を向上させる、魅力あふれる日々の営みです。「食事は神様から授かった芸術的な営み」と捉え直すことで、家族や友人へ料理

を提供し、おもてなしをする際の想いも自ずと深まっていくなかではないでしょうか。一人で食事をする時も、外食の時も、常に神様を感じながら食事を楽しむ心を大切にしたいものです。

日々の食事の際、「神様から授かった聖なる命をいただき、『美味しい』と感じる味わいを神様から授かっている」、そして「神様の分霊（わけみたま）」として、神様とともに楽しませていただく」という感謝を込め、真心から「いただきます」と唱えたいと思います。



瑞雲郷の梅

箱根美術館 全面休館のお知らせ

改修工事のため、令和8年5月7日より10月29日まで全面休館となります。

同館は、昭和27年の開館以来、約70年にわたり多くの方々に親しまれ、令和3年には国の登録有形文化財に指定されました。

今回の工事は、老朽化への対応と、文化財としての保存・活用のために行われるものです。

休館期間中はご不便が生じますが、趣旨をご理解のうえ、ご承知おきください。

なお、10月30日より、休憩所に新設したカフェの営業と、別館の仮展示室によるプレオープンを予定し、12月23日には、本館展示室のリニューアル公開が予定されています。

アートメンバーシップ HAKONE・ATAMI (友の会)のご案内

MOA美術館友の会は、令和8年4月1日より「アートメンバーシップ HAKONE・ATAMI」として新たにスタートしました。

本メンバーシップでは、両館への無料入館をはじめ、同伴者割引、招待券の進呈、催し物やお買物の優待など、各種特典が用意されています。

また、デジタル会員証によるスマートな入館や、オンラインでの季刊誌閲覧・動画配信など、時代に即した仕組みも取り入れられています。さらに、スマートフォンで完結する「モバイル会員」に加え、30歳以下対象の「U30モバイル会員」も新設されました。

美術に触れる機会を日常に取り入れ、明主様の示された「美による救い」を身近に感じていく一助として、ご関心のある方はぜひご検討ください。

入会方法や年会費、特典の詳細につきましては、MOA美術館公式ホームページ「<https://www.moaart.or.jp/membership/>」、または右記QRコードをご覧ください。





兜

世界救世教 明主様と聖地に直結する会
(聖地直結の会)

〒413-0006

熱海市桃山町26-1 救世会館 1 階

電話 0557 85 8060

FAX 0557 85 8185

seichicyokketsunokai@outlook.jp



No. 96 2026年5月15日発行

世界救世教

明主様と聖地に直結する会

